

「危険なる言語論」に答ふ

平 井 金 三 (投)

去る四月廿一日の夜、語學協會で私が講演した「日本語はアリアン語で有ると云ふ論に對し、五月十日發刊の帝國文學に「危険千萬なる比較言語論」と題した文が出たのを或人より示され始めて承知しました、之を一讀するに「危険千萬、突飛に大膽では困る、慎まねばならぬ、實に呆れる外は無い」等の語が多く有て、論者の眞意は知らねど、只漫然冷評をしたもので、眞面目に研究する態度で無いらしく、殊に明に本名をも名乗らず、恰も犬の遠吠の様で有るから、多忙の折、態々答辨する迄も無しと其

儘打棄置く積て居たが、再三人の勸むるに任せ一言申す事にしました。評論は右申す如く極て漠然たるものですが中にこれと思はるゝ節は、不規則動詞の活用が、或他の動詞より分出し、變轉し、若くは混淆形のもので有ると云ふ論者の説で、これは私がく、くる、くれ、こき、こよ等の變化は、インフレクシヨナルで有ると申したとを駁せられたのです。然るに私は不規則動詞而已と言ふたのでは無い、吾規則動詞と言はるゝものも決して一定の變化をせず四種六變化が有るとを述べ、之を「曲げ」有る語と申したが、今一一論じて居ては長くなるから、論者の説而已に付て申ます。論者の「他の動詞から分出變化混淆云々」と云はるゝは、くの變化の中、語尾の「る、れ」などの事と思はるゝが、規則動詞の中にも「る、れ」を附けて變化するものも有り、又之を附けずして變化するものも有る、これ等は、何とさるゝか、よし、夫も他の動詞より分出變化等したものと論ぜらるゝとした處で、不規則動詞の「く、が、こ、や、き」となるは何と言はるゝか、斯の如き變化をも漆着と言はるゝか、不規則動詞「丈」では無い規則動詞でも一二例を取りて言へば、「ゆく、が、ゆけ、ゆか、ゆき」となり、「う、が、うる、うれ、え」となる類は漆着變化と云はるゝか、論者は「漆着語に屬する土耳其語の中にも語尾が既に獨立の價値を失つて語根の中に融合したのも有るので有る」として、日本語も中には左う言ふものも有ると云ふ様に云はるゝが、これにて推せば日本語

の動詞中或少數のもの而已融合的變化をして、他は漆着的變化で有ると云はるゝもの、と解せねばならぬ、詳言すれば不規則動詞の變化は他のものと混淆して居るが、規則動詞は皆漆着的變化するものと思はるゝが如し、然るに右に示めす如く、ゆ、く、又、うの例に依りても、規則動詞とても論者の想像の如く漆着的變化をしては居ぬ、ゆ、く、う、丈を言へば、それも例外と言はるゝかは知らぬが、言ふ迄も無く吾一切の動詞は規則、不規則の二種に分類するものゝ、其規則動詞と言はるゝものすら皆四種六變化の何れかへ入るもので、其何れを互に比較しても一定の語尾を附着して變化する性質のもので無いとは最も明瞭の事實で、論者の云はるゝ融合したのもも有るので有ると云ふ様な例外として少數のものか融合變化するのではありません、もし吾動詞が同一語尾を附して漆着語變化するものと言はるゝならば、然る所を説明してもらひ度い、只これ丈では無い、助動詞の變化及形容詞の變化も論者の説の如く決して漆着的では無い、形容詞の如き一見漆着變化するもの、の如く見ゆれども、其二類の六變化を互に比較すれば、一定の語尾により規則的變化するもので無いとは誰も承知して居る事實では有りませんか、論者は、これ等も皆他より分出し混淆したものと云はるゝか、然らば一躰何の動詞、何の品詞が其様なものを分出し混淆しましたか。

次に單語の比較に付て、僅少稀有の例を取つて證據としたと言はるゝが之は例證の少いとを咎めたので、時間不足の爲豫定の所迄論述する暇が無かつたとは論者の見とめ言はるゝ處で、例證の多少は時間の長短によりて變ります、殊に日本の單語と印歐の單語と相同じものを數多示めす必要ありと言はるゝ日、印歐語對照の辭典を作くりて示めす外は有りません、論者も私が嘗て新公論誌上に論じた事を承知と有るから、同誌上に單語の比較を數ヶ月に亘りて掲げたのも御承知有ると存ます、先夜の講演の如き、言ふ可き事が多いに、多數の例は無論示めすわけに参らぬから、僅少稀有との評も出來ましようが、新公論に掲げた丈でも四百言程で、先夜示めた例數の比では無い、これとても決して大數とは言はぬ、手控中の小部分を抜出し示めた迄で、又調るに従ひ益々多く發見するのです、御入用と有らば御覽にも入れます、又世に發表もする積です、語學協會の語學にも此間の講演筆記に續き掲げるとに致して居ます、兎も角私が少數の語數を限りて之より以上無しと自白した上で無くば、僅少稀有の例と云ふとは駁論にはなりません、

單語の序に申ますが、私の單語比較を論者は評して「Dictionary」は辭引書也即辭典となり」と云はれた、之は前にも申通り冷評と申すもので、大切な學問の討究には不相應の御言葉で有るとの一言を呈し置きます、併し其次に「左は左様即然りては無いか」と有りますが、之に對し私は其通りと答へます、世人は歐羅巴語と日本語との相合ふものを一概に暗合と思ふて居るが、サンスクリットでも歐羅巴語と同じもの有るを始は暗合と思はれたが、遂には夫等が端緒となりて印歐語は眞の同族語である事を確かめしむるに至つた、外のアリアン語が見定められたるも左う言ふ歴史が有る然れば日本語と印度語との類似せるものも單に暗合として放棄すべきでは無い、能く之を研究せねばならぬと信じます、そこで「左様」の語に付て申しますが、様は附たものでもとは言ふ迄も無く、さて「左」の字に意味は無い、「左」の通の「左」とは別で有るとは無論です、又此「さ」は「そ」と言ふ時もある、代名詞の「それ」「その」「その」も同語です、然して歐語にても、然りの意のものは時代と國と變るに依て *se, sa, so,* *swa, swa, swe* 等の變化あり、又之が吾國のと同じく代名詞ともなる、即ラテンの代名詞 *suus* (自己) *san-* スクリットの *sva* (自己) 英語の古語 *so* 又 *soer* (自己) 獨逸語の *stich* 彼自身等は皆その變形で有るとは私が申迄も有りません、故に私は日本の「さ」「そ」而已ならず、それ、そ、そなども右に揚げた歐語と同一のもので有ると申すのです、これ等は語の形骸が合ふて居る而已ならず、變化して行く方向も、其根本も合ふて居ます、論者は此形骸の一致を大層嫌はれて何等頼む可きものに非ざる様論ぜらるゝが、私とても形骸而已を以て論ずるのでは無い、凡そ一國語が他國語と同族

て有るか否かを判断するには一の法而已頼む可らざるは私も心得て居ます、これを文法上比較もせねばならぬが同時に又形骸上の比較をするとも亦必要で有る若し之を取るに足らずとすれば、比較言語學の科は消滅する計で無く言語學の存立も危くなり、從て今日迄學者が調べたアリアン語族對照の辭典を始め、之に關する一切の書籍は悉く反古とせねばなりません。

於是乎論者は、言語の比較には年代の考を十分念頭に置いて居らねばならぬ氏の單語比較はこの年代の考が甚缺乏して居る様に思はれる、要するに氏の比較は印歐語の變遷と日本語の變遷とを研究せぬ論で即ち兩語の時代の考を無視したもので有ると云はるゝが、年代の考の必要は私も承知して居ます、然るに始から變遷の順序を年代に照して知るとを得る歴史的考證が存するものはよいが無ければ如何すべき、到底分らぬものとして棄つ可きか、歴史無き場合には各方面から總合して關係を見出すが學問の任務では有りませんか、いま日本語の變遷を知るには古文古記而已ならず、各地の方言迄も調ぶる必要が有る、然るに吾古文と云はば萬葉、古事記、書記風土記等の外之より古るき歴史的考證とすべき者は無い、それ以外には外國に求むる外は無い、そこで世の多くの言語學者は之をウーラルオルテイクに求めて居らるゝが、私は之を印歐に求めて居る、然るに論者は之を非と

して印歐語の變遷云々と云はるゝが、察するに日本語と印歐語との間の關係を示す歴史的考證は無いが、印歐間には之が具備して居たと云ふ論と見ゆ、左で無くは印歐語の變遷云々と云ふとは云はれぬ筈である、果して然るか、これ論者に依りて始て聞く處の新説で、それこそ歴史を無視した者と云はねばならぬ、先夜私が日本語と今日の印度及ペルシャ語の文法殆んど相同じきとを論じたが、今印度國中のアリアン語は數多の方言に分れて居て、今日迄重もに研究せられたるは、ヒンディー、パンジャビー、シンヂー、グジャラチー、マラチー、オリヤー、及ベンガリー語で有る、論者はこれ等に就ても立派な年代の考證が有つてアリアン語に相違無いと云ふとが分つたと言はるゝか、印度の古代語サンスクリットが既に紀元前第六世に日常使用せられざるととなつたとは學者の言ふ處で、其頃之に代つて居たは、ブラクリットで、これが凡そ紀元後第一世紀ころ迄、曲げを存して居たが、夫より後之が「曲げ」を失ひ分解的即漆着語の性質の印度各國語となつたと言ふので有るが、其變遷が何年で有るか、如何なる變遷が有つたか、今日では何等の考證が無い、而して今のヒンディー語は紀元第十一世頃より印度に顯はれたと言ふので、第十二世紀に始めてヒンディー語の書が出た之は今のヒンディー同様分解的で有つて、私が日本語文法と酷似すると云ふ一です、すれば第一世紀より下第十一世紀に至る九百年間は如何に

變遷したるか年代の考證も歴史の考證も今以て得られた事は聞きません否それは全く無いのです、こゝを以て學者の中には印度現今のアリアン各方言は全くアリアン語に非ず、チュレニアン族のドラヂアんで有ると迄思ふて居たものも有つたが、漸く今より僅三十餘年前に至りて始めてアリアン語であると云ふとに定まつた、併し前にも述べた通り論者の注文の如き年代の考證も變遷の考證も何にも無い、然らば其様な者を如何してアリアンであると證據立てたかと言ふに其方法は今私が日本語をアリアン語なりと證據立つるに用ふると同じ方法に依つた外は無いので有ると云ふ事を確實に斷言致します、そこで印度の現今日常使用する分解的各地方言は第一世紀より第十一世紀に至る九百年間に出来たものと定むるところが出来るかと言ふに、それも證據が無いから分らぬ、ブラクリッドが第一世紀迄曲げを存して居たと云ふとは今の印度アリアン語が皆其時代には、曲げを有して居たと云ふ證據にはならぬ、何故なれば、曲げあるブラクリッドで書いたものが有つたとて果して夫が印度到る處に日常口語として使用せられて居たと言ふ證據にはならぬ、ブラクリットとサンスクリットとの關係でも、其通りで文章にはサンスクリットを用ゐても口語にはブラクリットを用ゐたと言ふ如く、後者で文章を書ても別に方今の印度各國語の様なもの、が平常口語として用ゐられて居た、少

くとも或階級のもの、は然して居たと言ふとが出来、此一點は大に注意を要する點で、有つて全躰印度の學者は文章語には古語の躰に倣ふが常で、ことに可成サンスクリットに眞似せんとする傾向が強ひのです、そこで印度の文章語と口語との關係は恰も日本の文章語と口語との關係と類似して居る、ベンガリーの學者は殊に此風が盛んで、一にも二にもサンスクリットに寄らんとして居るが、然かも其國人一般の口語は極めて單純な組織である、此語で始めて書かれたのは今より三百年程前の事であるが、去迎今のベンガリ語が決して其年代に始めて出来たものではない、要するに現今の印度アリアン語は幾種もあれど、其何の年に如何に變遷したるやを知らず、假りに、ブラクリフト時代に今の印度語に類したるもの無しとした處で前後の間九百年の間隔が有つて、突然分解的國語となつて有る、之を前後同族の者である、而已ならず、前者が後者を生んだ者として、今は其間に誰も疑を容るゝ者は無く立派なるアリアン語として立て居る、以上述ぶる如く今の印度語の變遷は如何で有つたかと云ふと分らぬのが歴史である、從て印歐間の關係も歴史無しに結び付けたと云ふのが歴史である、論者は私が歴史的考證を無視すると評せられるが、論者こそ歴史的考證を無視して居られると言はねばならぬ。

論者は日本語をウーラル、オルタイクとせらるゝや否やを明言して居られぬが、

評論の全體より考ふるにウーラル、オルテイク説を執らるゝ者と見ねばならぬ果して然らば之を證明するに足る歴史的考證、年代考證有り、と云はるゝか

陳べ度い事は色々有るが多忙の折では有り、殊に紙面に限有れば長文は困るとのどて有つて此文さへ長きに過ぐると恐るゝから此度は以上大略を述べて之に筆を擱めます。